様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 １ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２８２６

研究課題名（和文）中世文献史料の複合的性格と知識の共有および継承についての研究

研究課題名（英文）Research on the complex character of medieval historical documents and shared knowledge and transmission

研究代表者
本郷　恵子（Hongo, Keiko）

東京大学・史料編纂所・教授

研究者番号：００１９５６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、古文書・古記録・編著物の三種の文献史料について、それらが相互に関連しあい、乗り入れあいながら伝来している状況に注目して考察するとともに、それらを書写・保管・利用してきた人々の意識や価値観を明らかにしようとしたものである。検討対象としたのは、説話編纂（文学史料）と歴史史料との関係／貴族社会の礼法や書簡作法に関わる故実関係史料の編纂と素材となる史料との関係／日記のなかに記録された文書の性格／複雑な伝来をたどった文書群の事情／国学者による中世史料の写本作成などである。
中世～近代にいたる、知識人の交流や史料の伝来関係は、知の体系の変遷や価値観の変容と大きく関わっていると考えられる。

研究成果の概要（英文）：In this research, we discuss three styles of medieval historical resources, documents, diaries and edited materials. We analyze their relations and way how they have been handed down to the present day to clarify the system of intelligence and transition of values in premodern society.

研究分野：　日本中世史

キーワード：薩戒記　有職故実　古記録　説話　国学

１．研究開始当初の背景

中世社会を知るための文献史料は、大きく古文書・古記録・編著物の三種に分類されており、それぞれが特有の性格を持っている。一方で、記録の中に貼り継がれた文書や紙背文書、発給文書の記録である引付、史書や説話が引用・依拠する文書や記録等、三種の史料は相互に関係しあい、乗り入れあいながら存在している。

これら三種のうち、古文書については古文書学という学問分野および方法論が確立している。ただし古文書学は、所蔵者が大切に保存管理し、代々受け継がれてきた文書を主に対象としており、中世の人々がやり取りした文書のすべてを網羅しているわけでない。むしろ非常に限定された性格の文書のみを扱っているといえる。

文献史料に関わる既存の学問領域がとりこぼしている問題をあぶり出し、総合的に検討することで、前近代における知的営為の基層をあきらかにすることが可能となるであろう。

２．研究の目的

古文書・古記録・編著物等の文献史料を研究の対象とすることができるのは、これらが長い年月を超えて継承され、書写を重ねられて、現代に伝来しているからこそである。前近代を通じての中世史料の伝来論および受容史は、必ずしも注目度が高くないが、史料論の一分野として総合的に位置づける価値があるものといえよう。さらに中世史料が伝来する過程には、書写・保管、廃棄や利用等、なんらかの形で史料に営為をほどこす人々の意識や価値観が大きく影響している。

三種の文献史料が相互に関連し、伝来してくる複合的作用に注目し、その具体相を提示するとともに、前近代を通じての情報の管理・継承の方法を考察し、歴史学的視点からのリテラシー論の見通しをつけることを目指して、三年間の研究を実施してきた。

中世社会において、様式・礼節を踏まえ、適切な文体を選んで、体裁の整った文書を作成することのできる人々は限られており、特殊な教育・訓練を受けた層といってよい。一方で、意志や価値を媒介する道具として、文書に対する社会的需要はきわめて高かったと思われる。それはすなわち、文書の作成能力や読解能力の有無とは別に、庶民も含めた中世の人々にとって、文書に対する感受性・親和性が内在化していたことを意味すると考えられるのである。

３．研究の方法

本研究では上記三種の史料の分類の、境界が曖昧な部分、重なり合う部分に注目しながら、中世社会における文書や文献の位置・役割を考えていった。具体的には以下の３点について検討していった。

（1）編著物について

たとえば『吾妻鏡』には、多くの日記や文書が引用されているが、そのなかには編者によって改変が加えられたもの、創作されたもの、配する年次が誤っているものなど、多くの問題があることが指摘されている。一方で説話集においても、同時代の記録や文書等との一致が多くみられ、それらの史料と説話編纂との関係を考える必要がある。説話については主に国文学研究の対象とされていたため、歴史史料を扱う研究者からのアプローチは十分とはいえず、あらたな検討を行うことによって、大きな展開を期待することができる。

（2）有職故実関係史料の分析と翻刻

貴族社会における儀礼への参加体験や、日常に使用される書状や文書様式等は、そのまま有職故実の資料となる。また貴族らも子孫のために、意識的に参考となる知見等を書き止め、記録を残そうとする。これらの営為が発展すれば、さまざまな先例や自身が体験した内容等を蒐集・整理・編集して、故実書に発展させることになる。日記の中に記録された文書の抽出、故実書の翻刻を行って、貴族社

会におけるリアルな意見交換やロジックの構成をあきらかにした。

（3）伝来が複雑な文書群について、伝来の事情の検討

中世の文書群が今日まで伝来するにあたっては、さまざまな経緯がある。本研究では、特定の家に伝わった史料群が、伝来の過程で他家の史料をとりこむ一方、一部が流出するなどの、複雑な事情に陥ったケースを検討した。

（4）尾張の国学者についての検討

いくつかの重要史料の写本をのこしながら、必ずしも事蹟のあきらかでない尾張の国学者に注目し、各所に散逸している写本の調査を継続している。

４．研究成果

前項の方法に対応した成果を記す。

（1）『古今著聞集』における俊乗房重源関係の説話に注目した。重源は二六段（神祇）・六〇〇段（変化）・六九二段（魚鳥禽獣）に登場するが、二六段以外は、伝来の過程で「春舜房」「春豪房」とする誤写が生じている。とくに六九二段は、重源の伊勢神宮参詣時のエピソードと考えられる。仏教の殺生禁断と神道の殺生祭祀との葛藤をテーマとする内容で、重源と並んで中原師員が主役となっている。師員は専修念仏の信者で、行基が創建した西芳寺を、法然を招いて浄土宗寺院とすることによって再興した（さらに南北朝期に、師員の子孫の摂津親秀が、夢窓疎石を住持に招いて禅宗寺院としている）。また彼の妻は、西大寺叡尊の鎌倉下向の際に宿坊を提供するなど、叡尊の有力な支援者であった（『関東往還記』）。師員と重源とを併せ考えることで、重源と専修念仏との関係、また専修念仏と勧進との関係が浮かびあがってくる。さらに第二六段の、伊勢神宮に参詣して、東大寺建立の願を認められたこと、第六〇〇段の上醍醐で写経中に天狗にさらわれたことという他の説話と総合的に考察し、勧進・専修念仏・神祇信仰・修験等の重源の信仰や活動の多面性が描かれていることをあきらかにした。

（2）西尾市岩瀬文庫所蔵『消息案』（柳原家旧蔵）の翻刻を行った。『消息案』は、応永二十五年（一四一八）～天正五年（一五七七）にいたる種々の史料を書写したものである。なかに「薩戒記」逸文を含むなど、他にみられない史料が写されている場合がある。文書の文面のほか、封式等についても詳細に論じられ、複数の意見やロジックが錯綜している様子をみることができる。

また『薩戒記』応永二十五年～永享九年（一四三七）記までのなかに収録された多様な文書を通覧し、「『薩戒記』所載の文書について」としてまとめた。これらは日記の中に記録されることがなければ、今日まで伝来する可能性がきわめて低い文書群であり、古文書学が研究対象としたり、様式分類を行ったりするものとは、性格を異にしている。一方で、貴族社会においては、儀礼・作法の文脈において、少なくとも明治維新直前までは実践的な意味を持って、活用された資料であった。ほかに中山忠親が編集し、中山定親が書写して伝来した『直物抄　第一』を翻刻した。

（3）千葉氏の庶流原氏に関係する『原文書』の伝来について検討した。『原文書』は、永禄～天正年間（一五五八～一五九二）のものが中心だが、なかに上野国の富岡氏の文書が、宛所を切断された状態で多数混在している。原・富岡両氏は、ともに下総結城において結城秀康に召し出され、秀康の移封にともなって、越前福井藩に仕えるところとなった。福井藩士という共通項によって関係を持ち、何らかの事情で、富岡氏が所蔵する後北条氏発給の文書の一部が原氏に移管されたと考えられる。「福井藩」という要素は、近代においても重要であり、同文書群の伝来に大きく関わっていた。

（4）尾張の国学者である取田（橘）正紹に注目し、彼の書写史料について検討した。筑波大学図書館等で、同人の著作および奥書を持つ史料の調査を行った。尾張の国学者のネットワークによる史料の書写・研究・伝来は、中世から今日にいたるまでの長い時間軸のなかで考えるべき興味深い問題である。近世の学問や知の体系、近代以降、それらが編成しなおされ、整序されていく過程とも深く関わっていると思われる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　１　件）
①本郷恵子、史料紹介　西尾市岩瀬文庫所蔵『消息案』、東京大学史料編纂所研究紀要、査読無、27 号、2017、132－142

〔図書〕（計　1　件）
①本郷恵子　角川選書、怪しいものたちの中世、2015, 196

〔その他〕
　報告書
東京大学史料編纂所研究成果報告 2017－3
中世文献史料の複合的性格と知識の共有および継承についての研究、2018、74
「薩戒記」所載の文書について／「原文書」の伝来について／史料紹介「直物抄　第一」

６．研究組織

(1)研究代表者
　本郷　恵子（HONGO Keiko）
　　東京大学・史料編纂所・教授
　研究者番号：００１９５６３７

(3)連携研究者
　西田　友広　（NISHIDA Tomohiro）
　東京大学・史料編纂所・助教
　研究者番号：９０３７６６４０

　遠藤　珠紀　（ENDO Tamaki）
　東京大学・史料編纂所・助教
　研究者番号：１０４３１８００

(4)研究協力者
　今井　泰子（IMAI Yasuko）
　荻島　聖美（OGISHIMA Kiyomi）